

京都大学	博士（文学）	氏名	楊 維公
論文題目	近世・近代日本における中国の戯曲・小説 —その讀まれ方をめぐって—		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>日本では、中国文学を読むことは長い歴史を有するが、近世以前はその読む対象は中国語の古典文で書かれたものが大半を占めた。近代以降、古典文つまり漢文は引き続き教養の一環として読まれ続けたが、戯曲や小説なども現代日本語訳され陸続と刊行されている。戯曲と小説も、その成立をたどると間違いなく古典の枠に入るとは言え、日本で作られた初期の中国文学史では、戯曲と小説が文学と見做されるか否かは大きな問題であった。日本人が中国文学を読む歴史を考察する際に、戯曲と小説の読まれ方とその変化はやはり避けては通れない問題である。本論文は、日本で刊行または抄写された戯曲や小説のテキストおよびその周縁資料を利用し、江戸から明治・大正にかけての中国戯曲・小説の読まれ方を分析する。</p> <p>序章「日本における中国の戯曲・小説の読まれ方という問題」では、中国文学史における戯曲・小説の特殊性を再確認の上、「読まれ方」という用語および中国の戯曲・小説の日本における読まれ方を研究する意味を説明する。併せて、日本で刊行または抄写されたテキストを使用する理由を述べる。</p> <p>第一章「『妙文』の『読法』—江戸時代における『第六才子書』の読まれ方—」では、金聖歎が編纂した『第六才子書』こと『貫華堂第六才子書西廂記』の江戸時代における読まれ方を論じる。まず、曲亭馬琴の書翰と日記を利用し、そこに見られる『西廂記』に関する記述は実は『第六才子書』にしか見られないことを指摘し、『第六才子書』が日本で実際に『西廂記』として読まれたことを立証する。しかし、遠山荷塘が残した二本（慶応義塾大学斯道文庫所蔵のa本及び国立国会図書館所蔵のb本）の『西廂記』写本は『第六才子書』を底本にしていない。その意図を考察するために両者を比較すると、b本はa本よりも『第六才子書』への言及がはるかに多いことがわかる。a本の目的が、会読や講義において原文を唐音で発音するためであることは、先行研究で指摘されているが、未完成の状態にあるb本の性格については、議論が尽くされているとは言い難い。本章では、b本がa本に比べて多くの金聖歎評を記すこと、また当時の文人において金聖歎が如何に評価されていたかを分析した上で、荷塘は、会読など公の場で使用するためにこしらえたa本で意図的に排除した金聖歎の痕跡を別にb本に残し、個人で読む時の内容理解の手助けにしようとした可能性を指摘する。換言すると、『第六才子書』をできるだけ排除したa本は集団的な音読の読書方式に繋がり、一方のb本は、個人的、内面的な黙読によって読まれたということになる。この個人的な読まれ方の出現から、日本における中国文学が、伝統学問より広</p>			

い意味での楽しむための読み物に変容する萌芽が見出される。

第二章「詩で読む「伝奇」—和刻本『蒲東崔張珠玉詩集』と江戸時代における西廂故事の読まれ方の可能性—」では、『蒲東崔張珠玉詩集』という『西廂記』に描かれた張生と崔鶯鶯の恋物語を七言律詩の形で伝える詩集を考察する。その内容から見れば、『珠玉詩集』は演劇文学である『西廂記』をより伝統的な七言律詩の形式に置き換えて表現するコンパクトな作品群であり、同種の詩集としては完成度が比較的高い。ただ『珠玉詩集』は『西廂記』のあらすじを手っとり早く把握するのに有効であるものの、七言律詩だけで『西廂記』の物語を存分に語るには限界がある。万暦年間以前に刊行された様々な『西廂記』テキストに収録されたにもかかわらず、中国では『珠玉詩集』単行本の存在は確認できない。また、付録として『珠玉詩集』を収録する『鼎鑄陳眉公先生批評西廂記』に付記される識語ではその出来栄えを酷評している。さらに万暦後期以降刊行され、のち『西廂記』の主要テキストとなった王驥徳『新校注古本西廂記』や凌濛初『西廂記』ないし金聖歎『貫華堂第六才子書西廂記』などは『珠玉詩集』を収録せず、作者とされる張楷も、錢謙益『列朝詩集』に付される小伝では批判めいた口調で語られている。しかし、中国のこうした状況とは対照的に、日本では『珠玉詩集』が単行本として世に伝わり、序文は『珠玉詩集』を宋玉の賦と並べるものとして高く評価している。また、狂詩人の植木玉厓や戯作者の花笠文京などにも『珠玉詩集』についての言及が見られ、さらに大田南畝も玉厓の記述を自身の随筆集『一話一言』に抄出するなど、『珠玉詩集』は江戸時代の文人の中でそれなりの関心を集めていたことが明らかである。また、張楷の他の作品も日本に将来されており、『珠玉詩集』が和刻本として出版される基盤は存在した。伝奇を白話である原典では読まず、伝統的かつ日本人にとって馴染みの深い漢詩で把握する読み方からは、物語性のある作品を個人で楽しむ中国古典の読み方が出現していたことが窺える。

第三章「『唐土名妓伝』と『柳橋新誌』—近世日本における『板橋雑記』の読まれ方—」では、清初に成立した、明末金陵の花街の繁華を追慕した余懷『板橋雑記』を扱う。『板橋雑記』は江戸時代に日本に伝わり、日本語訳付きの和刻本とその改題本『唐土名妓伝』が出版された。さらに、江戸末期から明治初期にかけて刊行された成島柳北の『柳橋新誌』も『板橋雑記』から影響を受けたものとされる。明治維新と相前後して刊行された『柳橋新誌』初編・二編の序文はともに時代の転変とそれに伴う花街の転変を強く意識しており、それはまさに余懷が『板橋雑記』を撰した目的と一致している。この場合、花街は即物的な存在より、日中両国における一つの共通した文化的象徴としての機能を有する。しかし、時代を遡って、『板橋雑記』に日本語訳をつけて換骨奪胎させた和刻本『板橋雑記』およびその改題本『唐土名妓伝』は「唐土」つまり中国の有「名」な「妓」女の物語という側面を重視し、新たな序文が付されたり、元の序文が置き換えられたりするのも、もっぱら妓女に意識の中心が置かれ

る。このように、和刻本出版を巡る状況は、余懷が作品に込めた時代の転変への悲哀と大きなずれが生じているように見える。また、喜多村信節が撰した『嬉遊笑覧』に江戸の風俗と中国の花街の事情と比べるために『板橋雑記』を引用する記述が散見されるが、王朝交代のことを言及する記述はほとんど見当たらない。これも『板橋雑記』の遊里文学の側面が多分に強調された結果と考えられる。つまり、和刻本『板橋雑記』および『唐土名妓伝』を、江戸の人々は中国の花街の手引書として読んで楽しみ、そしてそれを通じて中国の民間風俗に関する知識を手に入れていたのである。それに対して、明治維新の激変を生きた成島柳北を代表とする文人は、『板橋雑記』の背後にある時代の転変に著目し、さらに自身の経験がそれに重なっていることも影響して、自らの作品の創作にも繋がる読み方をするようになったことが見てとれる。つまり、中国古典のある一つの作品に、異なる経験や目的によって異なる読まれ方がなされたことが指摘できる。

第四章「江戸後期における叢書『説鈴』利用についての小考」では、清の呉震方が編纂したとされる『説鈴』という叢書の江戸時代における利用状況を簡単にまとめる。まず、喜多村信節『嬉遊笑覧』には『説鈴』所収書物の直接引用がしばしば見られる。第一章で利用した遠山荷塘による『西廂記』写本にも『説鈴』所収『言鯖』の引用があった。また、『説鈴』所収『蓴郷贅筆』からの引用も大田錦城『梧窓漫筆』に見られる。この『蓴郷贅筆』をめぐる、『説鈴』の版本によって収録に異同が見られることも大田南畝『一話一言』は指摘しており、当時の文人が『説鈴』にかなり関心を持っていたと推測できる。さらに、第三章でとり上げた『板橋雑記』は複数系統の版本を有するが、単行本として和刻されたのは『説鈴』所収系統のものである。

『説鈴』所収の書物は中国の民間風俗や伝聞を記す雑多な筆記類であるが、それらが江戸時代においてそれなりに読まれていたことは、当時の日本人が中国の民間風俗に目を向け、自分の趣味に応じて中国の書物を利用していたことを示す。

第五章「中国の日常風景の発見—井上紅梅の目に映った『金瓶梅』—」では、1923年に上海の日本堂書店によって刊行された井上紅梅訳『金瓶梅：支那の社会状態』を中心に、近代以降に刊行された中国古典小説の日本語訳を手がかりに、その読まれ方を検討する。『金瓶梅』自体は江戸時代の早い時期にすでに日本に伝わっていたが、日本語による訳や語釈書に関してはその物語の母胎となる『水滸伝』の流行ぶりとは異なり、さほどの影響力は持たなかったようである。一方、明治以降、日本における『金瓶梅』の受容はその評価の向上とともに急速な進展を見せ始め、大正後期に井上紅梅によって口語による全訳の試みも行われた。ただ、井上紅梅や日本堂書店によって刊行された他の書物の特徴を見れば、その書物のほとんどが中国の大衆文化を紹介する著述であり、『金瓶梅』のような古典文学の翻訳は極めて異例の存在に見える。また、当時の正統的な学者による翻訳である『国訳漢文大成』のおおむね訓読による

訳と井上紅梅の訳とを見比べれば、井上紅梅訳のほうがはるかに読みやすく、しかも彼が訓読と口語訳を使い分けていることがわかる。さらに、井上紅梅訳『金瓶梅』に注釈として付される「訳余閑談」に現れた言葉から見れば、その内容の大半は中国の日常文化の紹介であり、そこには『金瓶梅』訳に先立って刊行した『支那風俗』という書物へとリンクする記述も散見される。それらの記述は、実は大正後期から昭和初期にかけて井上が著した一連の書物と共通する。また、近年の研究では、『金瓶梅』自体も「百科事典的」な書物と言われ、その性格が井上による『金瓶梅』の読まれ方を可能にしたとも言える。近代の『金瓶梅』によって、日本での中国文学に対する認識とその読まれ方において一種の新たな価値体系が構築されたと考えられる。そして、井上紅梅は序文において『金瓶梅』が人間世界の悪の一面をさらし出す文学作品としてヨーロッパのものより四百年も早いと強調している。それは、中国古典文学と西洋近代文学の間に『金瓶梅』を位置づける重要な意義を持つ発言で、『金瓶梅』自体の価値の再考を促す意味を持つのみならず、日本語の口語訳の試みを通じて、日本における中国文学とその読まれ方がいかに従来の伝統学問から脱却し、世界文学の枠に溶け込んでいったかを考える糸口になるとも考えられる。

終章「伝統学問の枠を超えて—日本における中国文学の読まれ方の多様化—」では、本論文の全体像を総括する。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、日本における中国古典の受容の歴史を、その読み方の変遷という点に着目し問い直そうという企図のもと、執筆された。その試みの中心に置いたのは、中国の古典小説・戯曲という、正統的学問体系の中には組み込まれてこなかった文学ジャンルで、時代は江戸時代以降の近世・近代を対象とする。中国の古典小説、特に白話という口語に近い文体で書かれた小説が江戸時代の文人や文学作品に与えた影響については、夙に石崎又造や中村幸彦らによる重要な先行研究が多く存在するが、同じ一つの作品が日本と中国とでどのように読まれ、どのように評価されたのか、その共通性と独自性の所在を明らかにしようとする研究は、従来決して多くはない。論者はこの課題に、学習と娯楽という読書の目的、さらに江戸時代という読書行為が多様な位相を持ち得た時代に焦点を当て、日本における中国古典の受容史の、新たな一面を解明しようとする。以下、章立てに沿って、その注目すべき成果について述べる。

第一章では、中国元代に成立した戯曲『西廂記』を取り上げる。中国とは異なり、日本では娯楽的な芝居は上演によってではなく、脚本を読むことによって受容される。論者は、曲亭馬琴の日記や書簡から、『西廂記』のテキストとしては、中国と同様に、金聖歎による『第六才子書』本が広く通行していたことを明らかにする。さらに、遠山荷塘が残した性格の異なる二種類の『西廂記』校注本、慶應義塾大学斯道文庫蔵本と国会図書館蔵本の綿密な比較分析を通して、前者は荷塘が講師を務めた唐話一同時代中国語一の講習会で用いられ、後者は荷塘自身の個人的読書用の手控えであった可能性を指摘する。娯楽性の高い白話文学というジャンルにおいても、唐話学習という江戸時代新興の読書の場では、伝統的詩文に準じた音読による集団的読書が行われ、その一方で、個人的楽しみのための読書が並存していたという論者の指摘は、近世日本における漢籍の読み方を考察する上で重要である。

続く第二章は、その『西廂記』が日本では全く異なる文学形態によって読まれた痕跡を指摘する。それは、七言律詩全141首からなる『蒲東崔張珠玉詩集』で、本来は『西廂記』版本の付録的位置づけであったが、明の万暦年間以降は完全に淘汰されていた。それが日本では単行の和刻本として刊行され、その詩作を高く評価する文人も存在し、狂詩人の植木玉厓は、『珠玉詩集』に擬して『忠臣蔵詩集』を作ったと自ら語るほどであった。このような日中間の評価の違いから、論者は、白話を解さぬ日本の読者にとっては漢詩集というスタイルは、物語を把握するために有効であったと推論する。植木玉厓が『忠臣蔵』で擬作を試みたことを巡っては、読書対象としての『西廂記』のみならず、それが中国の流行の芝居であることを理解した上で、戯曲というジャンルのあり方を読解し消化しようとした試みとして興味深い指摘である。

第三章では、筆記小説『板橋雑記』を取り上げる。『板橋雑記』は明末清初の文人余懷の著作で、明代の南京秦淮の繁華な様子とそこに集う人々の生き様を、追慕の念を以て描く遺民文学である。本書は日本では、日本語訳付きの和刻本、後にそれは『唐土名妓伝』と改題されて、近世の洒落本流行に大きな影響を与えたとされる。さ

らに成島柳北は、『柳橋新誌初編』を幕末に、『柳橋新誌二編』を明治維新後に刊行するが、その『板橋雑記』との関係については前田愛による優れた論考が存在する。論者は先行研究を踏まえた上で、『板橋雑記』が二種類の和刻本（『板橋雑記』と『唐土名妓伝』）として版を重ねる過程を、その都度差し替えられた序文、原文と日本語訳との詳細な比較分析を通して浮き彫りにする。そして、明治維新を挟んで性格が変容した『柳橋雑記』初編と二編を、『板橋雑記』の読まれ方の変容という側面から再検討したことにより、これらの作品を読む行為が、時代転変を如実に反映することを描き出す。堅実なテキスト読解による論証は十分な説得力を有する。

第四章は、第一章から第三章まで論じた中国古典と、それを読む江戸の文人が参考書として使用した書籍の多くが、『説鈴』という叢書に収められることを巡っての小考である。『説鈴』は各地の民間風俗や見聞録を多く収録するが叢書としては雑然たる印象を与える。ところが日本では、版本によって収録文献に出入がある事実さえも当時の文人の問題意識に上がる程に、積極的に活用された。江戸時代に、どのような書物文化の中で中国古典が読まれたかを考察する上で示唆的な章となっている。

第五章では、白話小説『金瓶梅』の詳細な注釈付きの口語訳が、『三国志演義』『水滸伝』などに先行して、大正時代、井上紅梅によって刊行されたことを論ずる。『金瓶梅』は『水滸伝』のスピンオフとも言える作品だが、江戸時代には、『水滸伝』の流行とは裏腹に、翻訳や注解などはほとんど存在せず、ましてや和刻本も出版されていない。その状況が1920年代に一変し真っ先に口語訳が出された背景を、論者は『金瓶梅』の読み方の変容、さらに井上による注釈と彼の他の著述との関係などを通して詳細に論じ、それが単に文学作品の翻訳ではなく、中国民間社会風俗の紹介、謂わば百科事典的な著述として捉えられていたことを指摘する。井上の『金瓶梅』へのこのような関心は、リアリズム文学として『金瓶梅』を捉え直そうとする今般の研究の先駆けとも位置づけ得るといふ論者の指摘は、傾聴に値する。

このように優れた本論文であるが、題目で「戯曲・小説」と謳う中で、扱う文献が限られている印象は拭えない。特に『水滸伝』は、江戸時代を通じて最も読まれ、和刻本や注釈書、翻案物なども夥しい数に上っているが、その事象についても、論者ならではの視点からの分析を見せて欲しかったという思いは残る。『板橋雑記』と深い縁を有する『桃花扇』も同じである。しかし、この点については論者も終章において今後の課題として位置づけており、近い将来、必ず克服されるものと期待する。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2021年2月16日、調査委員4名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。